

青森県女性史編さん委員会編

『青森県女性史 あゆみとくらし』

曾根 ひろみ

(一) 一九七〇年代半ば以降の女性史研究の進展には目をみはるものがある。その時期から着実に積み重ねられてきた研究成果は、八〇年代に入ってから、論文集や講座・シリーズもの、単行本などとして毎年刊行されつづけており、こうした気運は今なお盛んである。とりわけ近年は、県史・市史などの自治体史の分野でも、女性史が積極的に取り上げられるようになってきており、自治体史の史料編・通史編の一章あるいは一節を、女性史関係の史料や叙述に割いたものも少しずつ出始めるようになってきた。しかし、自治体が専門の編さん委員会をつくり、自治体を単位とした女性の歴史を一冊にまとめ上げたものとなると、福岡県などの例を除いて、あまり見当たらない。このような中で、このたび、青森県が、女性史・民俗学の研究に従事する県内の女性研究者を中心に、『青森県女性史 あゆみとくらし』を編さん・刊行されたことは、先駆的な意味があるとともに、今後の女性史研究が、地域に根差して新しい展開を遂げることを期待させてくれるものでもある。以下に、本書の構成を簡単に示しておく。

《通史編》Ⅰ 近現代女性のあゆみ

序 章 近世社会のなかの女性たち

第一章 文明開化と女性の変革

第二章 産業社会の発展と女性の社会進出

第三章 大正デモクラシーと新たな女性像の模索

第四章 昭和初期の青森県と女性たち

第五章 戦時体制・戦時下の女性たち

第六章 平和・民主主義の発展と自己変革を進める女性たち

第七章 高度経済成長以降の女性の变化と運動

Ⅱ 女性の生活誌

序 章 女性と生活文化―民俗学的な視点から

第一章 女性のくらしのリズム

第二章 女性の一生

第三章 女性の世間

第四章 女性と説話・芸能

Ⅲ 青森県女性の現状と課題

序 章 女性の転換期としての昭和五〇年代

第一章 変わる女性の生き方

第二章 男女共同参画社会に向けて

終 章 二一世紀に向けてあらたな飛躍を―展望と課題

《聞き書き編》―生み出すよろこびに満たされて―

一 守り、伝える

二 支え、歩む

三 愛し、育てる

四 築き、ひらく

《近現代青森県女性史年表・青森県女性史関係文献目録》

以上のように、本書の構成は大きく《通史編》《聞き書き編》の二つの柱から成っており、《通史編》はさらに、「Ⅰ 近現代女性のあゆみ」「Ⅱ 女性の生活誌」「Ⅲ 青森県女性の現状と課題」の三部から構成されている。ここでは紙幅の関係上、《通史編》を構成する三部に限って紹介していきたい。

(2) 《通史編》「Ⅰ 近現代女性のあゆみ」は、歴史学の方法に基づいて書かれた部分である。対象とされている時代は、序章が近世社会の女性たちの姿を素描しているほかは、全て近代以降である。

まず、一〜三章では、維新後から大正デモクラシー期までの、女性の生活や意識の変化が二つの過程を軸に描かれる。すなわち一つは、「家」制度の確立に向けて法制が整備されるとともに、女性を対象とした教育制度が確立し教育政策が進展するという、政府によるいわば上からの過程である。こうした動向は、当然のことながら、一方で女性を「家」や良妻賢母という性別役割に押し込めようとするものであったが、他方で、女子の教育政策の進展が、女性にも幅広い職業の可能性をひらき、女性たち自身による労働環境の改善を求める運動や、女性の権利獲得を求める運動が展開していく大きな契機ともなったことが指摘される。また、この間の地方改良運動、民力涵養運動によって、女性たちの生活そのものも大きな変化を遂げ、さらに、資本主義の発展が大都市の月給生活者層の中に専業主婦層を生み出していくことが示される。

四〜五章では、一九二七年の金融恐慌、続く二九年の世界恐慌を機に、慢性的な恐慌状態に陥った日本が満州事変を起こし、その後一五年もの間つづく戦争体制に深く巻き込まれていく女性たちが描かれる。とりわ

け昭和恐慌期の青森県農村の状況は、女性史が生活史として叙述される面がつよいだけに、生活の貧困、女性の重労働や「身売り」等が浮き彫りにされている。

六〜七章は、敗戦後の混乱の中でたくましく生活を守り、新憲法と新しい教育制度の下で、自立を求め政治や社会に積極的に関わっていくとする女性たちの姿、さらに高度経済成長以降の女性たちの生活や価値観の大きな変化、多様に展開される女性たちの運動や行政の側の女性政策などが概観されている。

総じて、Ⅰの歴史編は、全国レベルでの歴史的推移や時代区分を踏まえつつ、可能な限り青森県内の女性の動向・史実を取り上げて叙述するという方法で書かれている。

(3) 「Ⅱ 女性の生活誌」は、歴史の表舞台に登場するわけではないが、日々の生活に地道な努力を刻んできた女性たちの日常のくらしを、民俗学的な聞き取り調査によって検討・把握し、記録したものである。時代的には、最も古い時期で大正末期ころまでさかのぼっており、これから聞き書き資料に、従来、青森県をフィールドとして行われてきた民俗学的な調査・研究を重ね合わせる形でまとめられている。

まず「一章 女性のくらしのリズム」で、農村部、山村部、漁村部それぞれ地域の具体的な労働の在り方、年中行事や休日、衣食住の工夫などが紹介され、「二章 女性の一生」では、女性が長い人生の中で、子供↓娘↓嫁↓母↓祖母へと、立場や役割を変化させていく過程をたどりながら、人生の節目節目で直面する遊びや習いごと、奉公、結婚、出産、子育て、主婦権の移動、年忌・年祝い等の実態と、その中で変化する

ていく仕事や楽しみが丹念に記述されている。さらに「三章 女性の世間」では、村の中で、あるいは村を越えて行われる仕事や行事のなかで生まれる女性たちの連帯や付き合い、旅や出稼ぎの中で交流や見聞を広めていく女性たちの姿が描き出され、「四章 女性と説話・芸能」では、昔話や餅つき踊りなど女性自らが伝承し担ってきた文化や芸能、あるいは女性の文化的役割が投影されているとみられる伝説や民謡の歌詞、神霊と交流が可能であるとされてきたイタコなど巫女の民俗が取り上げられ、それらの文化的意義について考察されている。

このⅡ部は、例えば、鯛から肥料を作る方法や炭の焼き方、昔話や盆踊りの伝承など、近世史を専門とする私自身にとって、学ぶべき点が多かった。労働や生活の細部を記録するという点で、あるいは女性が担ってきた様々な伝承文化を知るという点で、民俗学という学問のもつ底力を知らされる思いであった。Ⅰの歴史編が、近代以降の女性としていただけに、Ⅰ部Ⅱ部を併せ読むと、文字どおり、近代以降の女性の「あゆみとくらし」が立体的にとらえられるようになっていく。こうした構成は大変成功しているように思われた。

(4)《通史編》の最後、「Ⅲ 青森県女性の現状と課題」は、オイルショック以降、安定成長期に入ったとされる一九五〇年代を境に大きな転換を遂げつつある、青森県の女性たちの生活や意識の現状を分析し、男女が平等に参画する社会を展望する上での課題は何かを明らかにした部分である。この時期、女性の労働形態やライフサイクルの変化は、全国的な状況と比べると時期的に多少のズレがあるものの、青森県でも確実に進行していることが具体的なデータで示されている。また、農業労働

に従事する農村女性が抱えるさまざまな問題が提起されていることは、従来の「働く女性」概念が、大都市で雇用されている女性中心に構成されているものであることを改めて考えさせられた。また一九七五年（昭和五〇年）以降の、男女平等に向けた国際的潮流の中で、青森県でも女性行政が大きく進展したが、今なお解決されきっていない問題が多いのも事実であろう。最終章では、真の男女共同参画社会を実現する上で、最大の課題は性別役割分業の廃止・変更であること、とりわけ男性の家庭参画であることが指摘されて締めくくられている。

(5)本書は、青森県という一県を対象とした近現代女性史の通史であるというだけにとどまらない、大きな問題提起を行っているように私には思われた。それは第一に、女性史が政治や経済の動向と深く関わりながら進行する「生活の変化」を叙述することにかんがりの力点を置く学問であり、生活を主要な対象とするだけに、地域的な特質を豊かに描けるということ、第二に、近現代女性史の通史が、歴史学のみならず民俗学、社会学の手法をも駆使することで、より立体的・総合的に叙述し得ること、を示したという点である。

最後に、著者は、青森県と特別に縁があるものではなく、ここ数十年、女性史研究の仕事に携わってきたものにすぎない。本書を、全体的に評することは筆者の力量に余る仕事であった。書評としての不十分さは免れないと思われるが、その点はお許しいただきたいと思う。

(工藤英寿・長谷川成一監修 青森県刊 A4判 二九二頁)

三〇〇〇円 一九九九年三月刊)

(そね・ひろみ 神戸大学国際文化学部教授)